

校名：福島大学附属中学校

所在地：〒960-8107 福島県福島市浜田町 12-26

電話番号：024-534-6442

記載日：平成28年5月20日

記載者：大越一也

記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

平成29年度に創立70周年を迎える。県庁所在地の福島市内全域のほか、伊達市や伊達郡桑折町からも生徒が通学している。昔から、附属小学校からの進学者のほか、公立小学校からの進学者（全体の4分の1程度）があり、勉学、スポーツ、芸術などに意欲的な生徒が多く、保護者も教育熱心で学校教育に対して協力的である。文武両道をモットーに学習面、各種コンクール、中体連大会で成果を上げている。

学習面：ほとんどの生徒が地元の進学校へ進学している。首都圏の高校に進学する生徒も数名いる（平成27年度末には東京学芸大学附属高校や開成高校にも合格している）。

スポーツ面：昨年度は、中体連福島県大会において水泳総合2位、女子ソフトテニスが団体3位、陸上が個人で入賞（2年男子200m4位、共通男子400m5位）など活躍している。支部、地区大会では、野球、男女卓球、男子バレーボール、男女剣道、男子ソフトテニスも活躍している。

芸術面：音楽部（弦楽団）が毎年、こども音楽コンクール文部科学大臣奨励選考会（全国大会）に出場し、昨年度部門2位に輝いている。日本学校合奏コンクール2015ソロ&アンサンブルコンテストでバイオリン部門において文部科学大臣賞（1位）に輝いた生徒がいる。

さらに昨年度は、科学の甲子園ジュニア全国大会において、福島県代表として3名の生徒が出場し、見事3位に輝いた。

貴校の卒業生の活躍状況について：

特に卒業生の追跡調査は行っていない。本校の卒業生は、地元福島市内外において、行政機関、警察、医療、教育、金融、経済界等、各界で活躍している。TBS NEWS23のキャスター 星 浩氏、衆議院議員 金子恵美氏、福島県教育委員会教育長 鈴木淳一氏などは本校の卒業生である。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

本校には、県教育委員会との人事交流により県内7つの教育事務所から、各地区の中核となる教員が推薦され、配置されている。本校勤務後は、すぐに教頭や指導主事として転出する教員と教諭として出身地区に戻り、その後、教頭や指導主事となり活躍している教員がいる。本校勤務経験者は、ほとんどが校長で退職することになっている。参考までに、平成28年4月1日現在で、本校転出後から退職前の現職校長等の状況は次のとおりである。現在、教諭でいる教員も今後、ほとんどが管理職や行政職となり、県内各地での活躍が期待されている。本県附属中学校では、年1回定例の附属中学校に勤務している教員と附属中学校勤務経験者との情報交換会を行っており、本校勤務経験者の活躍状況は、附属中学校が逐一把握している。

本校勤務後の活躍状況（本校勤務後～退職前）

校長職 20名（中学校15名、小学校5名）

【21%】

教頭職 10名（中学校10名）

【11%】

行政職 29名（本庁：主幹1名、管理主事4名、指導主事4名、

【31%】教育事務所：所長1名、主任管理主事1名、指導主事3名

県教育センター：主任指導主事1名、指導主事4名

市教育委員会：課長1名、管理係長2名、指導係長1名、指導主事6名）

教諭職 30名（中学校29名、小学校1名）

養護教諭職 5名（高校2名、小学校3名）

大学 1名（准教授1名）

合計 95名

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

大学の附属中学校というメリットを生かし、常に福島県の中学校教育の学習指導法について実践的研究を推進し、その成果を毎年1回研究公開を開催（6月下旬開催：平成28年度は6月28・29日開催）し、400～500名の参加者に提案している。また、福島県中学校教育研究会という研究団体の各教科（国語・社会・数学・理科・英語）の事務局として、研究の方向性や理論を提案し、福島県の教科教育を牽引している。その他、福島県教育センターの経験者研修や専門研修等の講師を務め、実践的研究の成果を受講者に伝えている。

平成28年度の研究テーマ「主体的・協働的に学び、次代を創り出す生徒の育成」は、次期学習指導要領の趣旨を生かした授業づくりを考えている。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

福島県内において、常に目標とされる中学校。特に学習面においてはもちろんであるが、スポーツ、芸術面、そして生徒指導面においても目標とされるよう実績を上げている。福島県は、面積が広く、県内7つの教育事務所があり、それぞれの地区に「県南地区の附属中」「いわき地区の附属中」など本校をモデルにがんばっている中学校が多い。また、教員も附属中学校に勤務することに憧れをもち、附属中学校に勤務できたことを誇りに思い、勤務しているときはもちろんであるが、本校転出後も出身地区で中核として活躍している教員がほとんどである。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

少子化に伴い、教員養成数や教員養成学部の削減により、本県のような地方においては、教員採用の段階で質の低下が危惧されている。従来、教員養成学部の時代は、大学に入学してくる学生の意識も教員になるという目的意識が明確であり、学部での教育、附属学校における教育実習、そして教員採用後も大学教員や附属学校教員とのネットワークを生かし、継続した研修により、教員の力量向上が図られた。しかし、現在は、教員養成学部でなくなった影響もあり、福島県内から入学していく学生は、教員を目指す学生が多いが、他県からの学生は、人間発達文化学類、共生システム理工学類といった学類生として入学してくるため必ずしも教員を目指す学生とは限らない。特に理科教育に力を入れようとしても、理科の免許取得者が少なく、免許取得を目指す学生の中には

教員を目指す意識が低い学生もいる。さらに技術科の免許取得者はほとんどいない現状にある。

そこで、教員養成の厳しい現状の中でも、教員免許取得を目指す学生に対して（前期4週間、5月：約40名、後期4週間、9月：約40名）、副免実習（1週間、11月：約50名）情熱をもって教育実習生の指導に関わり、教職の魅力を伝え、未来の有能な教員を育てている。今後、福島県では、教員採用時に複数免許所有者の優遇措置をとることがはっきりと打ち出されており（平成30年度より）、副免実習の実習生の増加が予想される。福島大学では、公立中学校での母校実習も実施しているが、教育実習に対する受け入れ体制も不十分なため、教育実習の中身にばらつきがみられる。今後、本県ではこれから教員の大量退職期を迎え、多くの教員を確保するためにも福島大学の学生に対するより質の高い教育実習を提供するために附属中学校は欠かせない。